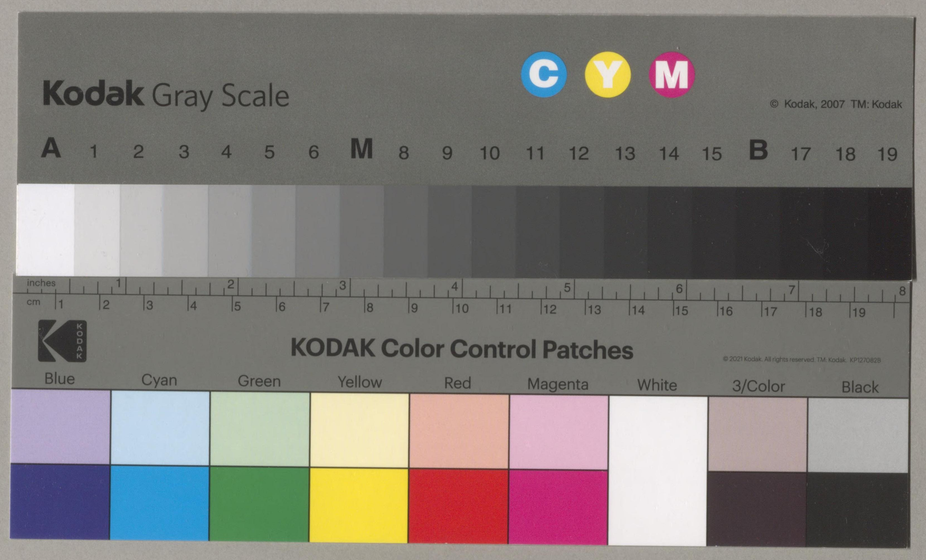


415
30

415-30
12005014714 89

30.11.30

21109

51

賜覽天

關東大震災畫報

寫真時報

大正
1.10.20
藏書

東京寫眞時報社 發行

大正十二年十月廿日第壹號 定價金壹圓

各府縣に亘る

震災の被害

救護事務局の調べ

臨時震災救護事務局に於て各警察署の調査報告に基き九月十二日迄に判明した震災被害を取纒めたが燒失倒壞家屋及死傷者の數は左の通りである

家屋の被害

	燒失戸數	倒壞戸數	計
東京市	二六九、六四六	一五、九四二	三〇五、七八八
東京郡部	八、六二五	二〇、二〇五	二八、八三〇
横濱市	七、〇〇〇	七、〇〇〇（倒壞を含む）	七、〇〇〇
神奈川郡部	五、八六一	一、八五五（同）	五、八六一
靜岡縣	三、九六六		六、七五五
外に流失四八四戸、浸水三七〇戸			
千葉縣	—	八、六二九	八、六二九
埼玉縣	—	九、九六六	九、九六六

死傷者の數

	死者	傷者
東京市	七四、〇二四	三九、七六七
同郡部	一、五七七	七、九〇八
横濱市	二三、七六七	四〇、九一〇
神奈川郡部	四、三三一	二三、八八三
靜岡縣	二八二	一、〇六九
千葉縣	四三一	一、四六二
埼玉縣	二〇三	三七九

尙右の外東京府には二十三萬一千二百八人の所在不明者ありこれは他府縣への避難者及死體の發見されぬ死者である尙東京市に於ける死者の男女別を見ると男女の判明する者男一萬五千六百二十八人女一萬六千百二人で三萬九千二百九十四人は男女の判別つかぬ死體である

大地震經過

中村博士發表

九月一日正午の初震以來の餘震回數は

一日二日正午迄三五六回　三日正午迄二八九回
四日　同　一七三回　五日同　一四八回
六日　同　七十八回　七日同　四十五回
八日午前六時迄三十四回

漸次減少しつゝあるが中村博士は語る『餘シン極めて順次に減少しつゝあるが尙今朝位のものは當分あるかも知れない餘シンのシン源地は近いものでは横濱附近遠いものでは伊豆大島附近で大體二つにわかれてゐる今回驅逐艦で視察したところによると地割の最も甚だしかつたのは房州の内海神奈川縣一帶東京附近伊豆熱海附近で大島伊豆方面では土地がやゝ低くなり房州方面では約一間程隆起してゐる』と

◇警備陸軍の兵力

福田戒嚴司令官の隸下にあり目下警戒中の全軍は左の如くにして市内外及近縣の狀況は大に沈靜せり

一　近衛師團
二　第一師團（東京）
三　第二師團（仙臺）ノ歩兵二聯隊
四　第八師團（弘前）ノ歩兵二聯隊
五　第九師團（金澤）ノ歩兵二聯隊
六　第十三師團（高田）ノ歩兵二聯隊
七　第十四師團（宇都宮）ノ歩兵二聯隊
八　第十五師團（豐橋）ノ歩兵四大隊
九　騎兵六箇聯隊
十　野砲兵及野戰重砲兵ヲ合シ七箇聯隊
十一　工兵十八箇大隊（各師團ヨリ召集）
十二　鐵道二箇聯隊
十三　電信二箇聯隊
十四　衛生機關及救護班十九箇（各師團ヨリ召集）
十五　航空學校及航空二大隊
十六　自働車一隊
十七　氣球一隊
十八　陸軍大學校（約三百名）
陸軍士官學校生徒隊
其他陸軍各學校教導隊

七百年前の昔を語る

名所舊蹟全滅に歸す

古社寺の復活の見込なく
生命を奪はれた鎌倉の慘狀

鎌倉では鶴ヶ岡八幡宮を始め建長寺圓覺寺鎌倉宮長谷觀音其他の名所舊蹟は全部倒壞しこれが復活の見込がないので鎌倉町は全然生命を奪ばれた形である

社告

大正十二年九月一日突如として大地震大火災が關東各地を襲ひ、東京、横濱を初めとして小田原、横須賀、鎌倉等、町と云わず、村と云わず、山河餘す處なく慘害を蒙り其程度又古今未曾有と云はれ、父母妻子の離散死傷算なく一字の死一都市一村の消滅限りなく人生悲慘の極みであります。

我社員一同は茲に死者に對しては限りなき哀悼の敬意を捧げ負傷者其他の罹災者に對しては深甚なる同情を表します。次で又早速御見舞を忝ふせし地方愛讀者諸賢に對しては厚く御禮を申上げます。幸に本社のみは地シンのみで火災の厄を免れましたが一部の印刷所、製版所、製本所等燒失し社員の内には種々の厄災に遭遇した者もありました。一時は社員一同茫然自失の態でありましたが、顧つて考へれば斯かる紀念すべき未曾有の大シン災を速かに寫眞に依つて廣く天下に傳えそれを永久に保存すべく本誌を作る事は天が此際我社に與へたる一大責務である事を深く感ずる共に社員一同は自已の不幸を顧みるの暇なく直に本誌發行の準備活動を開始し萬難を排し身命を堵して（現に或社に於ては遭難者を撮影せんとして其憤慨を買ひ半殺にされた者がある）奔走の結果辛ふじて材料の蒐集印刷製本に努力する等艱難の結果終に他誌に誇るべき有意義なる紀念號を發刊するを得たのであります。

我等の一生に於て二度と再び遭遇し得ざる、三百年の文化の消滅帝都の一大變革を紀念すべきの至寶として日本全國の各家庭に於て本誌一部を備え付られん事を切に御勸めする次第であります。

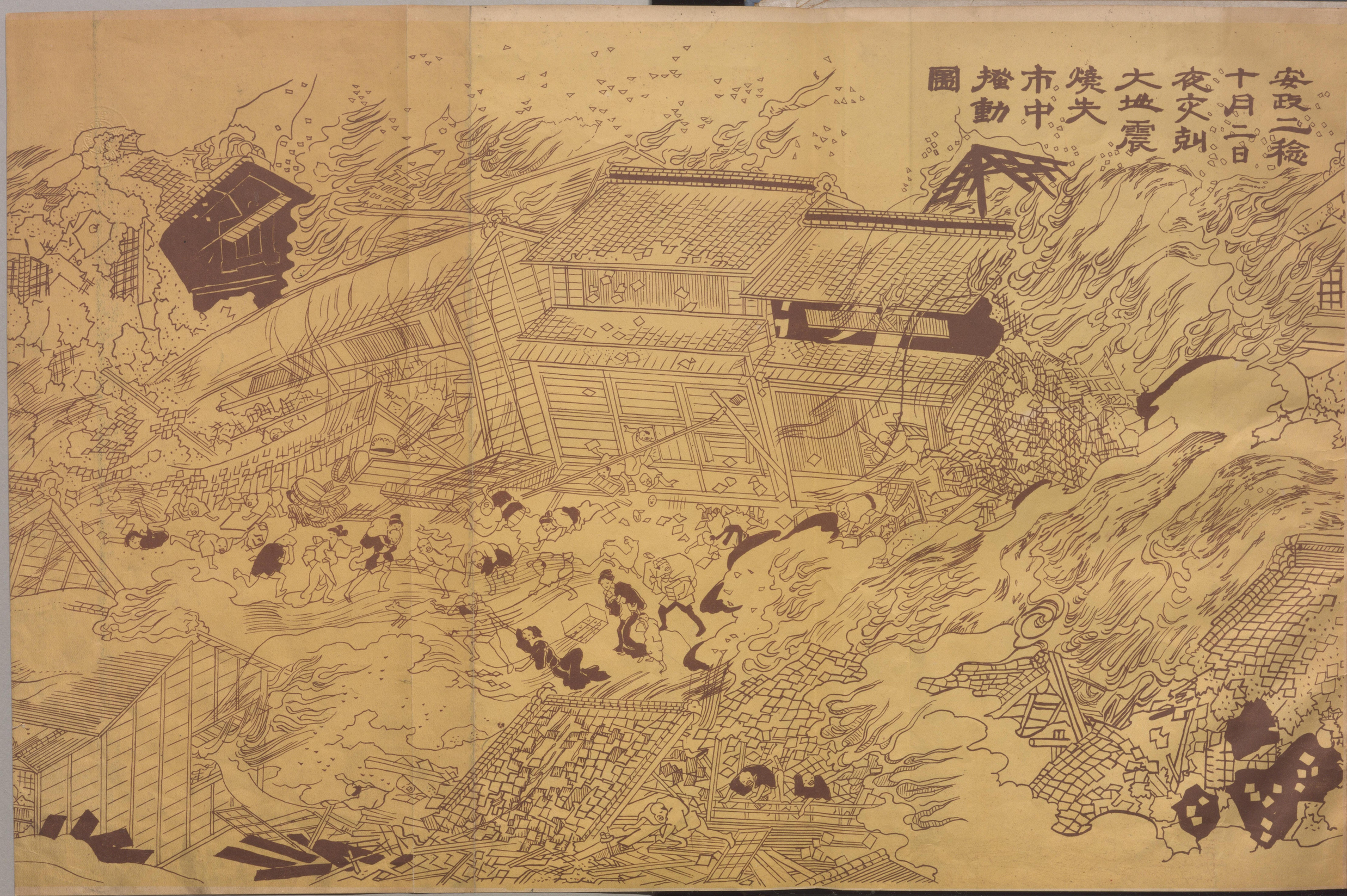
尙最後に本誌編輯に當り關東戒嚴司令部が特に本誌の爲めに便宜を與へられ特種の寫眞多數を貸與せられたる事を附記して置きます。

本誌一部賣は臨時定價壹圓
（朝樽、鯖、滿、三十錢增）

大正十二年九月廿八日印刷納本
大正十二年十月一日發行

東京市赤坂區丹後町九十七番地
編輯兼發行
兼印刷人　森本信次郎

東京市赤坂區丹後町九十七番地
發行所　東京寫眞時報社
電話芝（八七四番　五九九番　六九九番）
振替東京四九七八番



九月一日正午の初震以來の餘震回數は

十三

電信二箇聯隊

のみ地シンのみ大災の厄を免れましたが一部の印

燒跡御巡視中の攝政宮殿下

右ヨリ　戒嚴司令官福田大將　近衛師團長森岡中將　永田東京市長

各府縣に亘る

一日二日正午迄三五六回　三日正午迄二八九回

十四　衛生機關及救護班十九箇（各師團ヨリ召集）

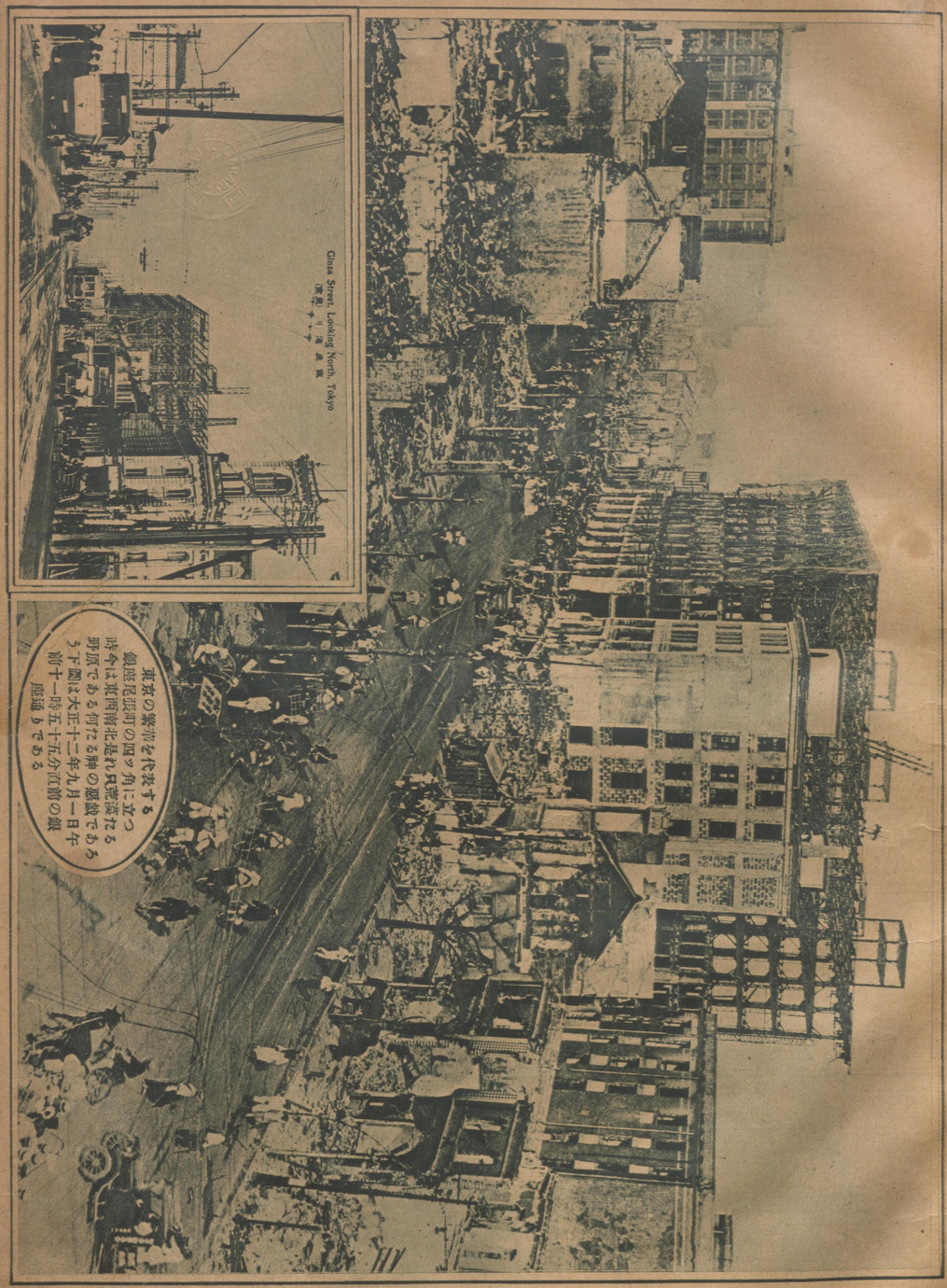
十五　九名負傷者五十大家

刷所、製版所、製本所等燒失し社員の内には種々の厄災に遭遇した者もありました。一時は社員一同茫然自失

おいたはしい三殿下

相州由井ヶ濱御用邸にて御薨去遊ばされし
山階宮妃佐紀子女王殿下（御年二十一才）
同小田原にて御薨去遊ばされし
閑院宮寛子女王殿下（御年十八才）
同鶴沼にて御薨去遊ばされし
東久邇宮師正王殿下（御年七才）

大地震後の東京

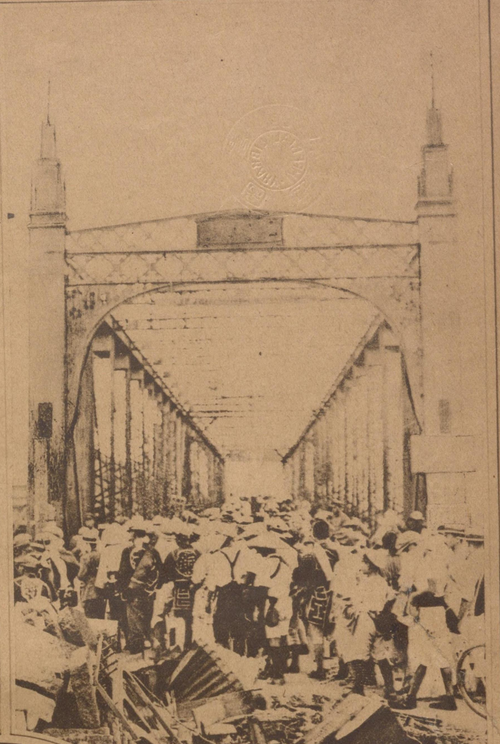


Ginza Street Looking North, Tokyo

東京の繁華を代表する銀座尾張町の四ッ角に立つ時今は東西南北焦れ只荒涼たる野原である何たる神の惨鼓であろうか下圖は大正十二年九月一日午前十一時五十五分直前の銀座通りである

世見仲草淺た つ舞仕て け焼上
世見 仲 草 の 前 い な け 焼左

下、焼け落ちた神田橋を修繕する工兵達の居て



一、焼け殘つた吾妻橋此橋は橋板が焼けた丈で殘つた其後へ早速工兵が板を渡して修理したので數萬の群集がつめかけて居る

二、折れた十二階淺草名物の一つ十二階が地震で第八階目からポッキリ折れた、上へ居た見物人は生きた者はない

三、吉原の焼跡名物の吉原は今度の火事で殘われたが焼ける度に歡樂の一時は見る千人の死者と何百名の惨たる事であろう

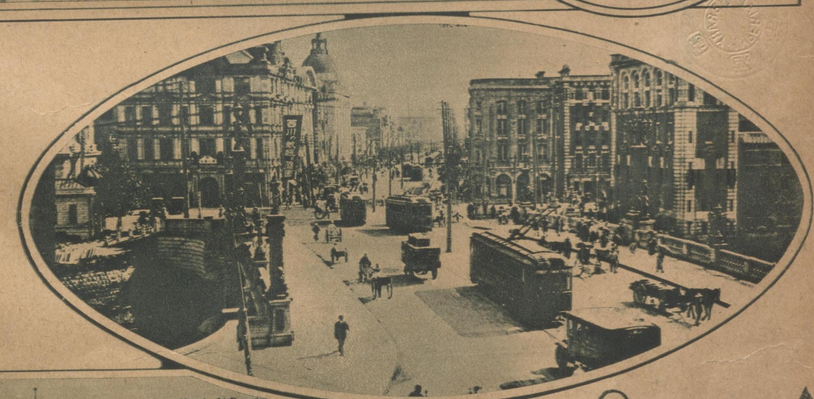
吉原燒跡見聞記

白札赤札の屍體

不夜城もいまは夢の跡
娼妓千人は水火に死亡
灰の中で讀經

焼野原の日本橋と
コの字に焼け残った銀座
榮華を誇った日貫きの大通りに
乗合の牛車が通ふ.

空中から見た東京目抜きの日本橋通家方此方に殘つて居る黑い影は皆中味が燒けて灰となつた三越初め堂々たる鐵骨の建物である対火を誇つたそれが見一なめになめ盡されるさほさても不思議な大火焰の猛威であるド間は眼わづた三越と日本橋通りである。



上野公園の一色活版所附近

上野公園附近の火元と云はれる

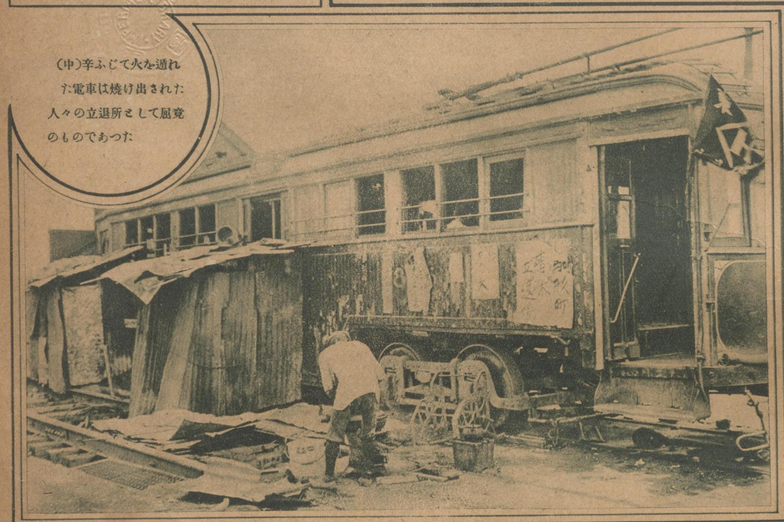
下谷神田方面の人々を助けたのは上野公園であつた、矢火と共に全山上に集まつた人々は五萬を越えて流石に廣い上野も人で埋められた併し上野停車場一帶が燒ける時には寫眞に示す西郷銅像附近も熱さに追はれてにげ廻る人々の阿鼻叫喚で物スゴかつたが、幸に山上は助かつた山下は上下の寫眞で見らるゝ通りの燒野原となつた。

下圖のとはしのばす池さ辨才天でえれは幸に火災をまぬがれた。

涙をさそふ
迷子の群れ
警視廳に八百餘名

今回の大災害に際し親に捨てられたあはれなお子が現在警視廳に三十四名、管下各署に八百三名計八百三十七名が保護されて居るが内二十名ばかりは十日夕刻までに身元が判明してそれ〳〵母の手に渡されたが中には殆と半狂乱となり親の名前や住所を忘れてしまつた者が多く十日夕刻孤児会から警視廳に送られた鎌倉生れの浪本しづ子（この如きは可愛我が子の顔を見て何等感ずる様子もなく行先も解らないので居るこの外第生不良に陥つて死亡する憐れな小兒が多い

（上）恐るべき猛火の前には何物もない僅か前の時間迄繁榮たる繁華街立て〻走つて居た電車も哀れに骨な殘して焼けて仕舞つた



（中）辛ふじて火を逃れた電車は焼け出された人々の立退所として風変のものであつた

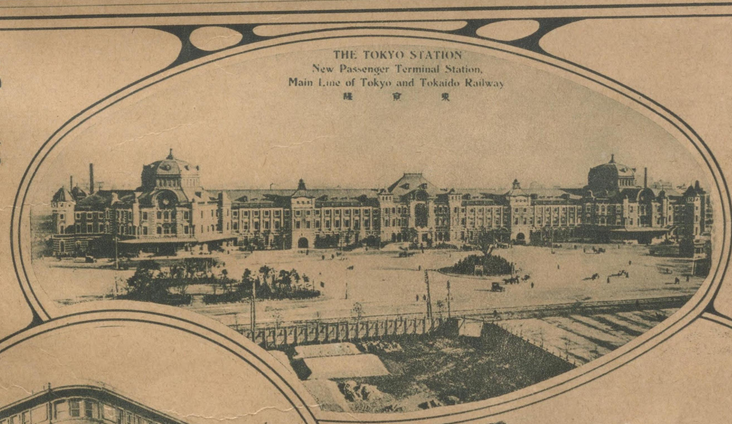
踏み越えた死體は
娘夫婦と孫
わが家族のゆくへもわからぬ清政技師

（下）墓窩された人間性圖は銀座村松時計店の焼跡を掘る人々でまだ火はもえて居る二日三日頃に各所貴金屬商の焼跡には之れを掘る人で賑わつた

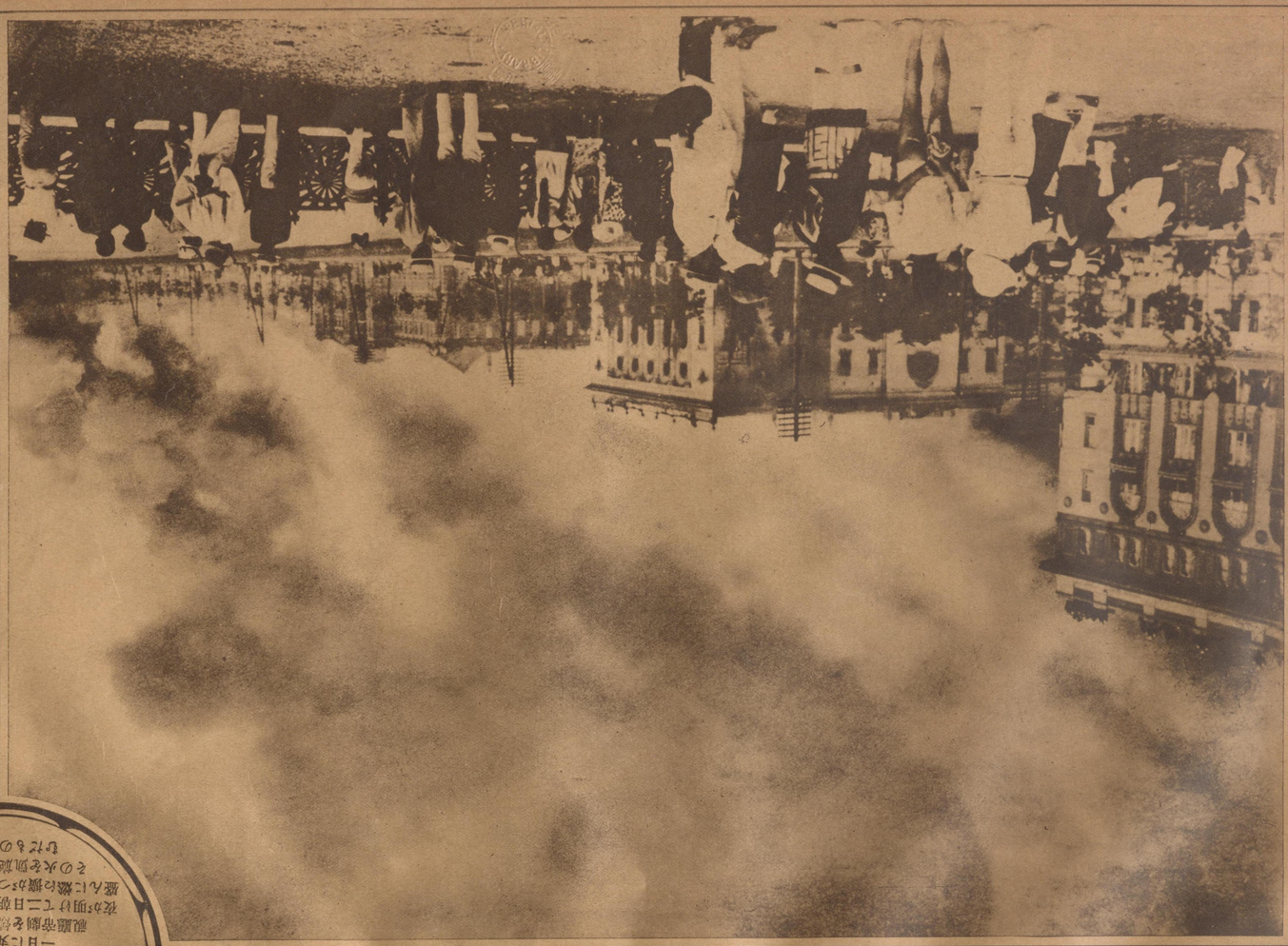
損害百億圓か
建築のみで卅五億
恢復には二十年を要する

假小屋で芝居
廿日過に萬事決定
焼殘つた歌舞伎座は工事を進め人心を和らげる娯樂物

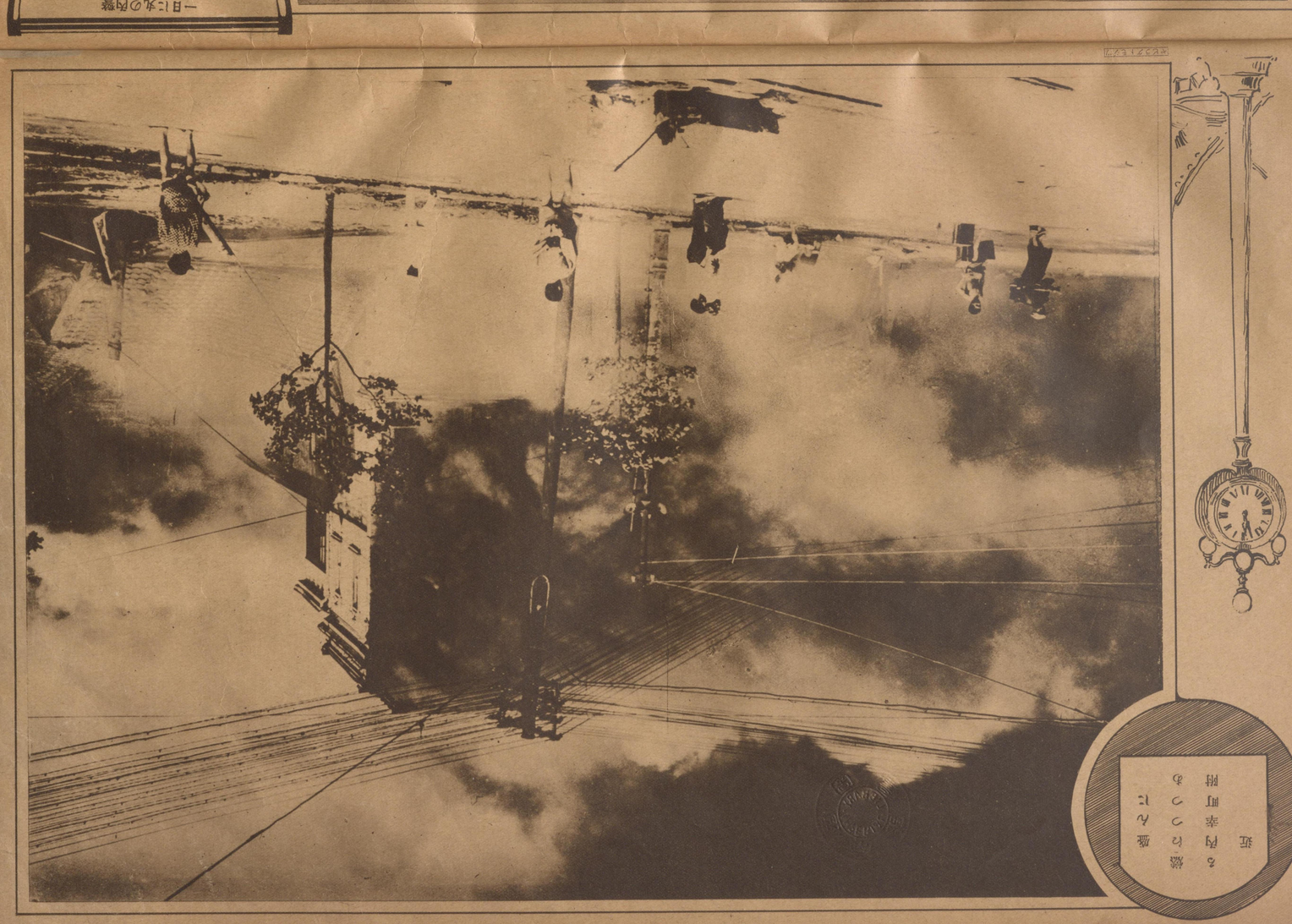
焼け殘つた丸の内の大建築



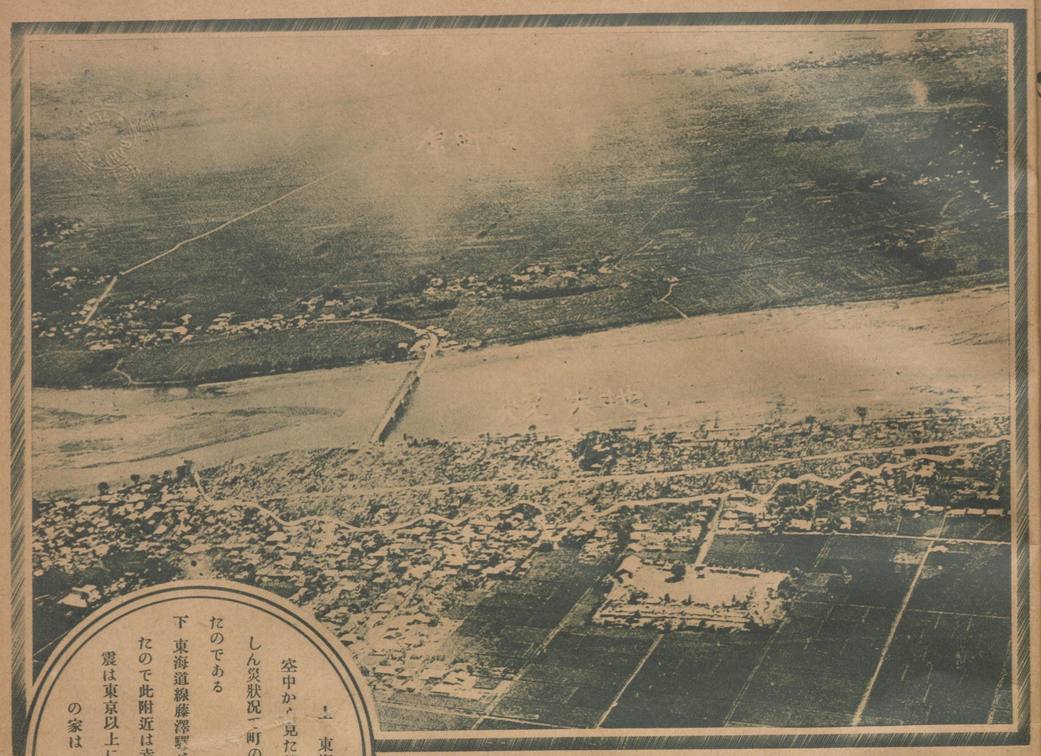
上圖は東京停車場附近を空中飛行機から見た俯瞰圖下の圖の上は東京驛の正面、右は郵船ビルデングと海上ビルデング左は丸の内ビルデング郵船ビルと丸ビルとは地震で大分二階三階を傷められた



一日に丸の内警視廳帝劇を燒いた火は其夜が明けて二日朝日比谷方面にも盛んに煙を噴ぶつて居る。寫眞はその火を凱旋道路から望むもの



燒ける丸の内幸町附近



中を空の寫しをも縮害甚市たした
惨も濱撮横接續圖
最たつから

棧橋附近の焼横濱

稀有のしんさいの魔の手に呪はれた神奈川縣下の惨害は調査の進むに從つてます〳〵酸鼻の極に達し到底筆紙のよくする所ではない累々たる死体の山、茫漠なる焼野原にさ迷ふ飢民の群れ宛としてこの世ながらの修羅地である八日朝迄に達した各地の情報は左の通り

横濱の死者三万餘
郡部の死者四千餘
負傷は横濱て四万千餘
郡部の概數は二千八百

横濱市の死傷者は所謂繁華街の調査八日する所によれば左の如し

▲伊勢佐木署（住民七万四千六百五十五人、死者一万二千百五十三人、負傷者二万四百四十九人）

▲加賀町署（住民八万四千百六十八人、死者四千八百九十八人、負傷者七千八百七十人）

▲壽町署（住民六万九千百八十二人、死者二千三百六十八人、負傷者三千四百六十八人）

▲戸部署（住民十万八千人、死者二千七百九人、負傷者三千九百九十九人）

▲山手本町署（住民六万人、死者七千七百六十九人、負傷者千四百六十四人）

▲水上署（住民六千人、死者千二百八十人、負傷者七百七十人）

▲神奈川署（住民三万一千百六十五人、死者百三十二人、負傷者三千八百八十八人）

全滅した横濱市の全景新聞復寫

空中から見た相模國厚木町のしん災狀況一町の半分は火で焼かれたのである

東海道上の下

東海道線藤澤驛と其附近を空中から見たので此附近は幸に火を免れたが地震は東京以上に甚しかつた滿足の家は一戸もない

湘南地方
山崩れて埋沒
死傷一万餘名
小田原箱根の惨狀

平塚火藥庫爆発し
相摸紡また全潰
全町死傷六百五十餘

富士紡工場全壞し
女工千五百名惨死
従業員百四十名も死す

一　淺草被服廠專賣局煙草工場の近衛師團司令部
二　關東戒嚴司令部の前の自動車中隊の集合
三　庭に天幕を張りて救護事務を執られる第一師團司令部
四　市外寺島村小學校に於ける第九師團司令部
五　萬世橋附近にて活動中の第十三師團衛生隊

事變勃發間もなく戒嚴令を施行され陸軍は活動を開始し帝都救濟の爲に全力を上げ第一近衛の兩師團を以てするも兵力たらず大阪より衛戍に至る各師團から兵を繰り出して活動の一二を紹介致します

大地震に大火災を加へてさしも帝都の榮華の夢も紅蓮の一なめにはかなく醒めて今は早殘骸を吹く朝夕の秋風が身にしむ。神の前に人間の力の弱さよ。時めく政府の大建築も大半燒けて。寫眞は上が內務省の殘骸で下が大藏省の燒跡である。

大詔煥發

十二日午後左の大詔煥發された

朕神聖ナル祖宗ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成跡ニ鑑ミ皇考中興ノ宏謨ヲ繼承シテ肯テ怠ラサラムコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ニ祖宗ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空然ノ大戰ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ奚ゾ圖ラム九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ潰倒男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リテ炎燄天ニ冲リ京濱ソノ他ノ市邑一夜ニシテ焦土ト化ス此ノ間交通機關杜絕シ爲メニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其ノ慘害ヲ大ナラシムルヲ想起セシム政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ淒慘朕深ク自ラ戒愼シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜ヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲ニ多衆災民ノ安堵ヲ脅カスカ如キコトアラハ人心動搖シテ底止スル處ヲ知ラス朕深クヲ之ヲ憂慮シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ道ヲ講セシメ先ス焦眉ノ急ヲ極ウテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ擧クント欲ス抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スル所トナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其舊形ヲ留メス難依然トシテ我國都タルノ位置ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ若衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其ノ慶ニ賴ラムコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノ事ヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬違算ナキヲ期セムトス在朝有司能ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ禁遏シ民心ヲ安定シ一般國民亦能ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕萬古無比ノ天殄ニ際會シテ邺民ノ心愈ミ切ニ寢食爲ニ安カラス爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

大正十二年九月十二日

各大臣副署

今曉も尙ほ延燒

軍隊爆彈を投じて破壞し猛火の喰止めに奔走

三日午前零時大阪府警察部に入つた情報によると、東京市内は尙ほ盛んに延燒しつゝあり、可燃性の建造物に對しては近衛第一の兩師團兵士が爆彈を投じて破壞し猛火の喰ひ止めに奔走してゐると

一 本所割地橋鐵柵に架橋する名古屋工兵第三大隊

二 兩國橋橋上橋にも數多の死體をかき分けて工兵隊・機關銃隊が陣をかまへた

三 後藤番地は橋脚丸太が完成した架け替へ中の一も燃え落ちた。假橋工兵が焼つた鐵骨に假橋をかけた

四 橋詰警戒へ間の間へ動もりやす

大東京再興と經濟復興講究

東京實業家協議會

ニコライ

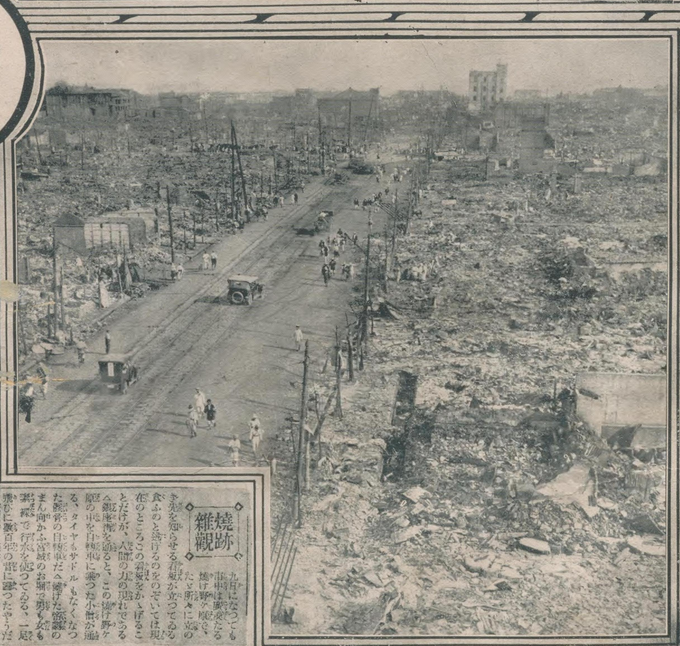
再建は不能

ニコライ堂はやはり大地震時に倒壞を免れ、ちらほら殘骸はあるけれどもアパートメントの如くしてやはり焼けて了ひました。ですから再建は不能であるかも知れません。聖堂は宗教的ですから、ちゃんと祭壇の上に聖像が置かれねばならぬ。ところが、ニコライ堂の聖像は、ちゃんと祭壇の上にあるのに、ビザンチン式の大伽藍は、ちゃんと焼け落ちてしまつたのである。

廣野原となつた神田

ネグラを探す憐れな女學生

ニコライ堂や明大や醫院を始め西園寺公邸も一溜りなく灰となる



一神田さん人形町方面の焼野原

一神田さん人形町方面の焼野原

神田方面の焼跡で、人形町方面の四辺が有名なお稲荷さんの社殿で、ちゃんと建物が焼け落ちて了ひ、社殿の前の大きな楠の大木も、焼け落ちました。

人形町方面の焼野原であるこの辺は、人形町方面の焼野原であるこの辺は、

焼跡雜觀

九月一日以來つゞいた、市中焼跡たる、焼け野原、焼け野原。

たゞ所々に立ちのぶ煙を知らせる看板が立つてゐるのみ。

食ふのと寝るところの看板あり、好るこの看板のみ。

在のところ、焼け野原の中に、たゞ所々に、焼け野原の中に、

ふ、銀座、浅草、品川、この焼け野原の、

原の中を自轉車に乘つた小僧が通る、タイヤもなくなつた、

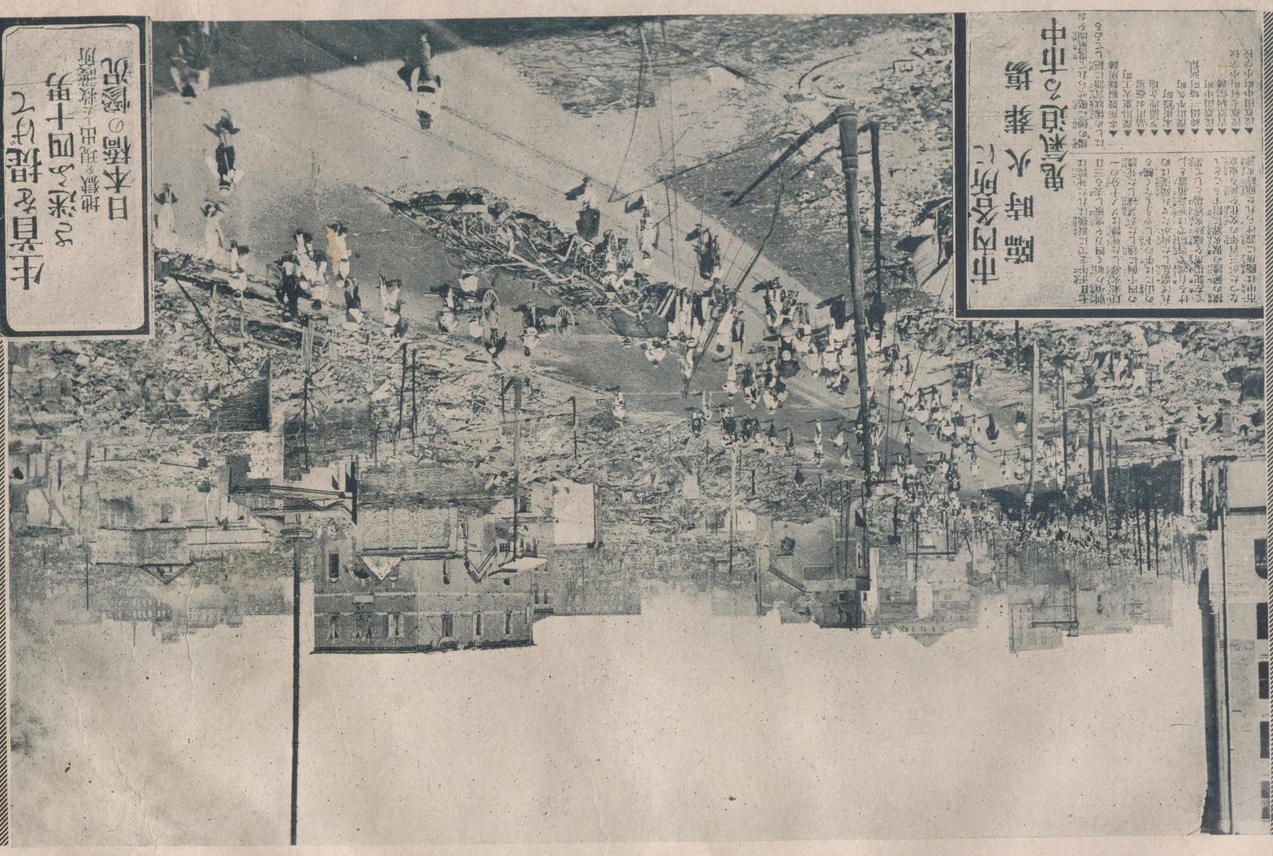
ボロボロの自轉車だ。傾げた、籠の、

まん中かふ、焼け、焼の、

裏、焼け、焼の、

焼け、焼の、

焼け、焼の、



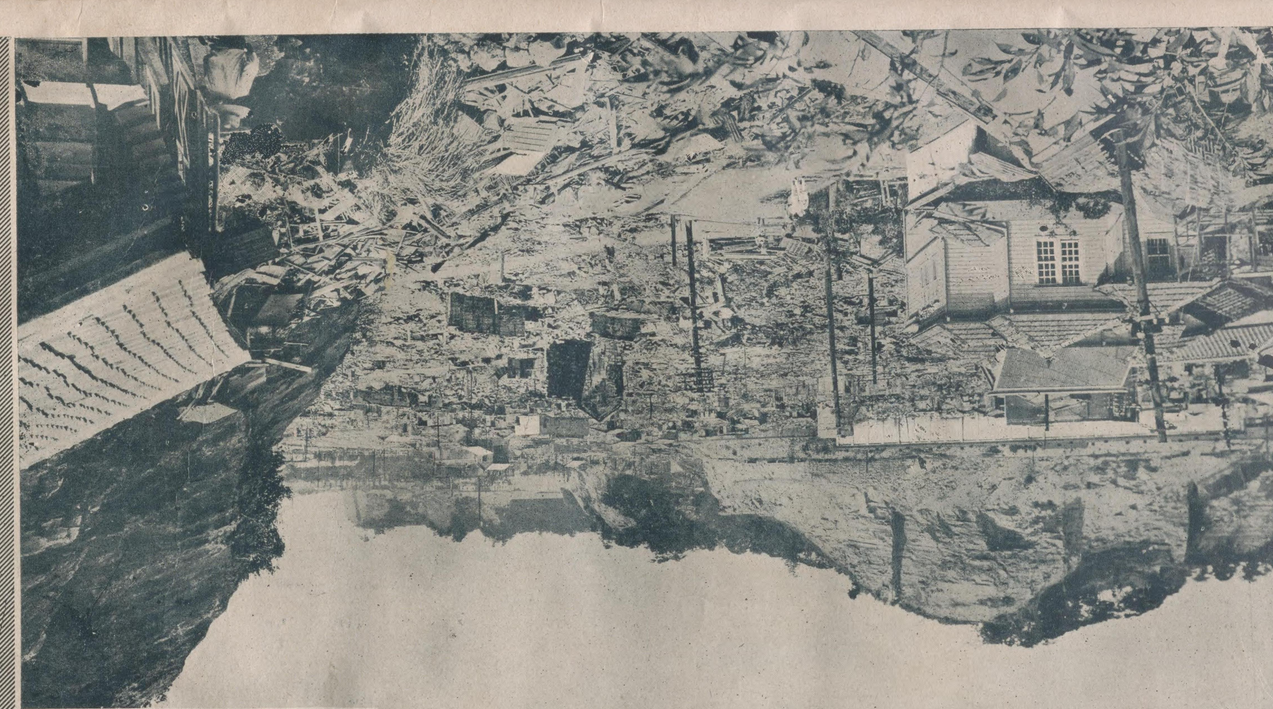
生首を提げて迷うの巡査十勇

地獄を現出した救護所

日本橋の惨況

市内各所に臨時火葬場

鬼気迫る市中



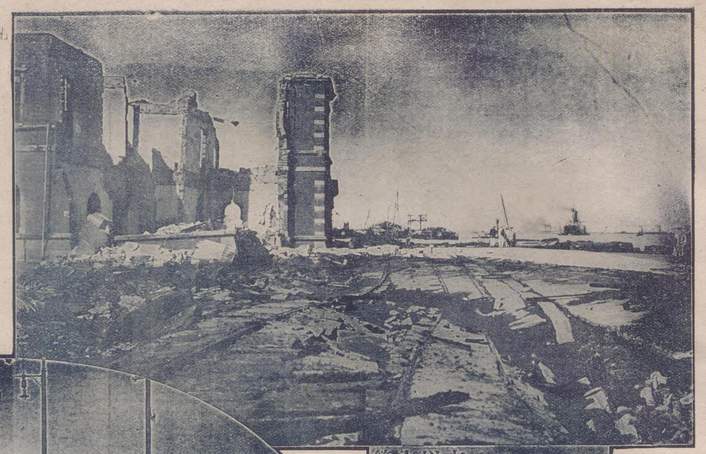
小學生二百名出勤れて生埋め

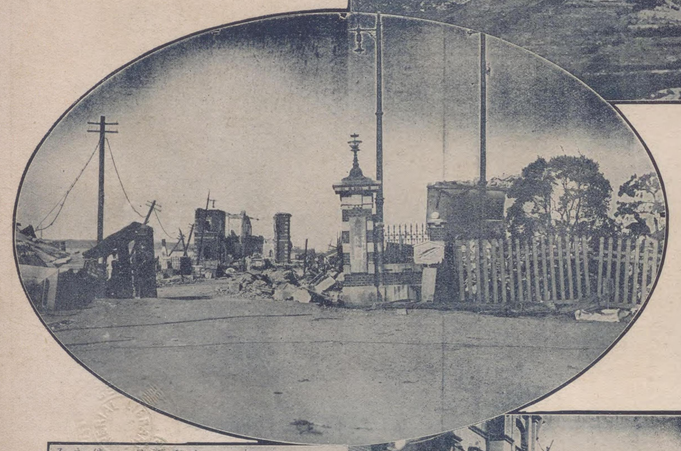
数日も殆んど死屍

焼ける横須賀市

全滅せる横濱

横濱方面では一日正午少し前突然空中に振りまされる如き激震起り僅かに數分家屋は悉く倒壞血みどろの市民は右往左往の中に市内數ヶ所から出火忽ち、しき檢察官は全くこの世かの景を呈すべき形容詞はまた人間によつて作られしを疊へ倒壞を免れた建築は正金銀行其他の大建築も間もなく猛火の餌となり に燒き盡くされ死者數萬に上つた





裁判長、檢事正みな壓死

横濱地方裁判所は

執務中に全滅

末永横濱地方裁判所長、福鎌檢事正以下四十有餘名の判檢事は執務中全部壓死した司法省では目下善後策を講じてゐる

大震源地は横浜附近か

中村博士の新研究 餘震々源はこの邊

中央氣象臺の中村博士は十三日神奈川縣厚木方面から鎌倉、藤沢方面の觀測をへて歸つて來たが一日のた貌の

震源地

についてあるひは相模灘の東部附近ではない

横浜附近

かとの推定を起し原因が解けてゐる。二三日中に神戸の海上氣象臺の技師に來る筈で大體震源がわかる筈である。十四日の知らせは十三時半の檢に感ずる地震はありまだ当分この餘震は止びず、餘震々源はいづれも

から

横濱附近

の西部にあるとのことがもう心配する様な大きなのは終じてあるまいと

横濱稅關埠頭附近の燒跡

横濱市の目抜本町附近の慘狀

同 正面入口より埠頭を望む

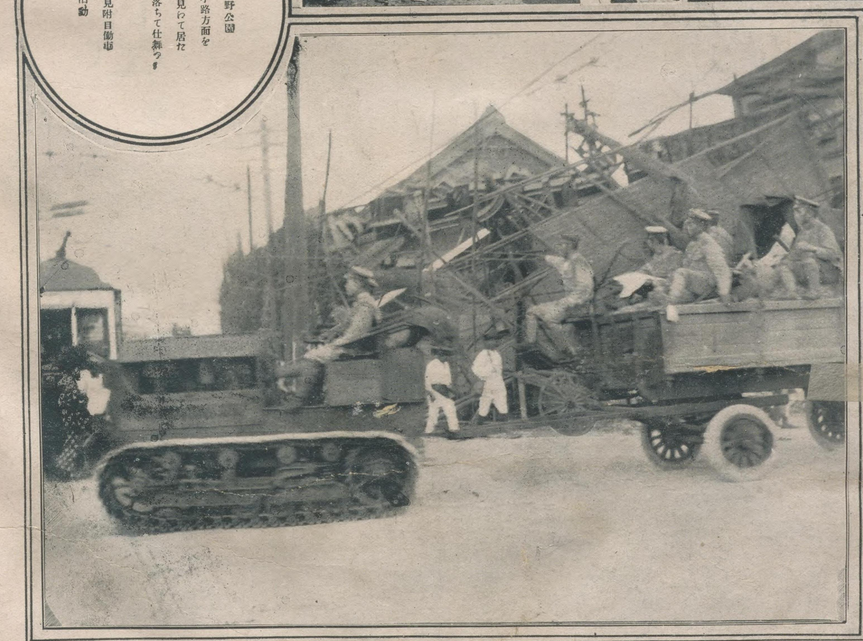
同 東埠頭の燒跡より港内を望む

亡びゆく名所と再生の都の新名所

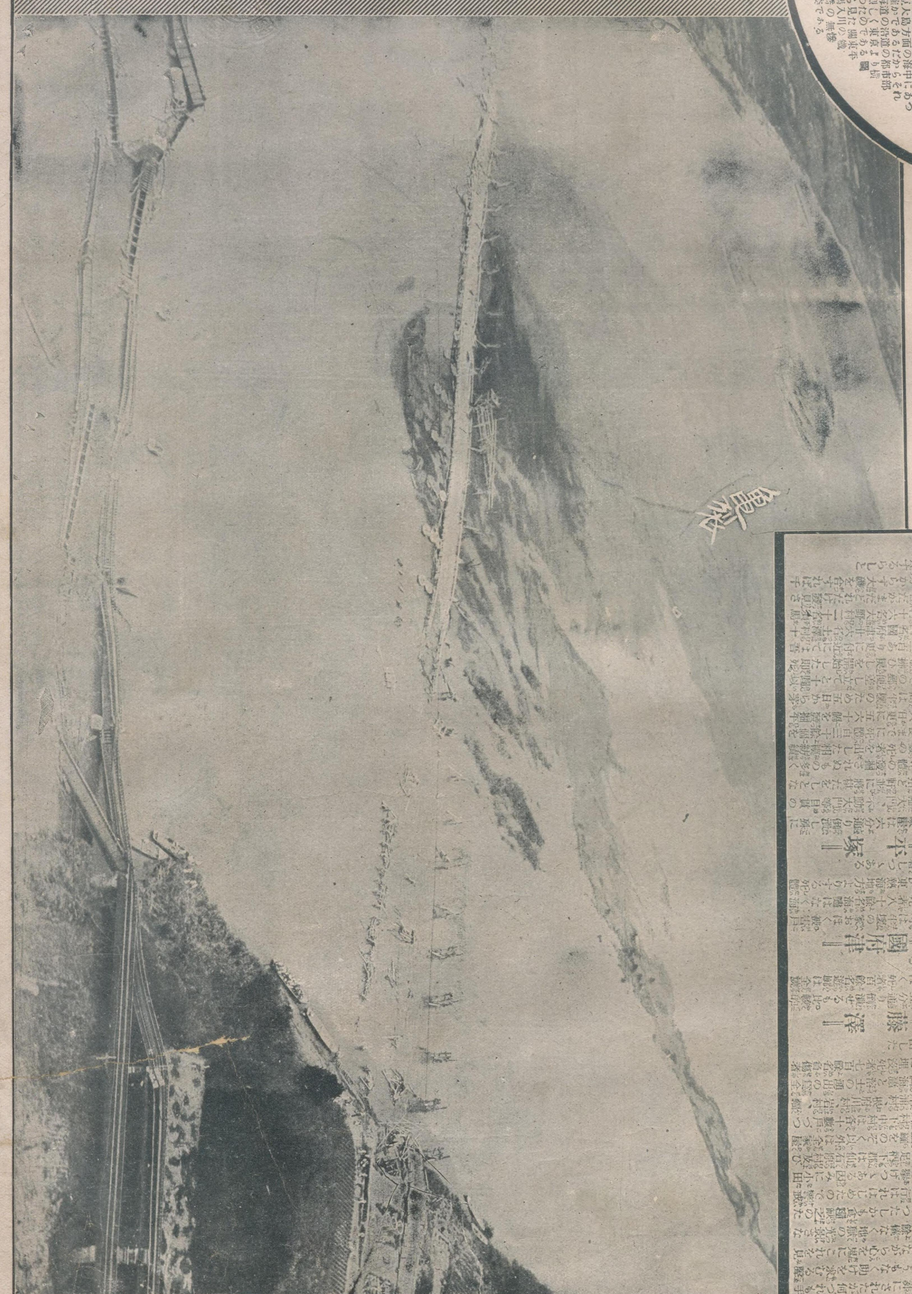
一夜にして烏有に帰した大江戸文化の數々

上 上野公園下から廣小路方面を望む、正面に見えて居た坂屋は全く燒け落ちて仕舞つた。

右上。下は赤坂見附目働車隊の苦動



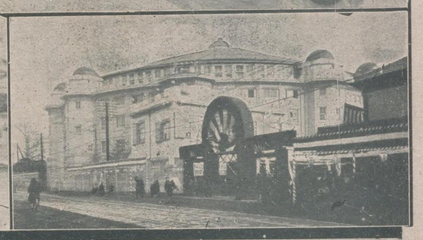
今回の地震の震源は駿河の海中にあつて非常に東北方面の海岸に近く、而かも一番激しく感じたのは東京が一番ひどいのでもあるが、次は横浜、小田原、熱海、沼津、三島、甲府、藤澤、平塚、鎌倉、大磯、小田原の順番だと云ふ感覚である



一、橋
張賀市線
里通りの倒壊家屋
二、同停車場前の山崩れ此下に電車開通待機す
三、電信電話の復旧を急ぐ海軍電信隊の活動
四、町に出張た俄か
一鋒服婦

雨にぬれた避難者の群

冷氣に襲はれて悲慘な小屋掛け



一 帝國劇場のガラスは殆んどこなつたに
二 帝國ホテルの崩れない部分は
三 九月二日の丸の内の光景
四 出來上つた避難者の小屋掛

大地震の罹災者へ 御手許金一千萬圓

きのふ聖上より下賜

△攝政宮よりは御沙汰書

今回稀有の大地シン東京及び近縣を襲ひ之に加ふるに大火災を以てしてその慘害甚だ大なるは實に國家生民の不幸なり予はその實狀を見聞して日夜憂戚し殊に罹災者の境遇に對して心深く之を傷む玆に内帑を頒ちその苦痛の情を慰めんと欲す官民それ協力して適宜應急の處置をなし以て遺憾なきを期せよ

御あ惠まねみく

國民と不幸を共にしたは、せめてもの慰めと背の官の悲しき仰せ

武彦王殿下のお言葉

此度の災害は未曾有の慘事であつて多數の國民を失つたといふことは自分としても甚だ殘念であるし遺族の人としても堪へ難い情にあるであらう、併しこの際多數の國民と一緒に佐紀子が亡くなつたといふことは自分としても聊か心安んずるところがある、佐紀子としても聊か滿足して居ることと信ずる

天佑——梁の間に御無事の妃殿下

師正王の傷ましき御最後

憂ひに閉ざされた東久邇宮家

玄米握飯を召して

攝政宮の御精勵

の窮狀に御慮を惱ませられ日常御生活も罹災民同樣の生活を遊ばされ襯衣一枚にて御政務を執らせられ御食事の如きも玄米握飯を召せらる、等只管民草の上に御同情を垂れさせ給ふと提り多き極みである

おいたはしい佐紀子女王殿下の御最期

吾妻博士が拜診中梁が落ちて御母宮殿下も御輕傷

孤兒は何程かと皇后宮の御尋ね

毎日の情報をお手に大御心を惱まさる

僅か六臺の自動車で寛子女王の御葬儀

極めて質素に執行さる

關東大震災記

噫!大正十二年九月一日 此日は何と云ふ惡の日魔の日であつたろう。關東の住民吾日本全國民の永久に忘れる事の出來ない日である。

此日は丁度一年中の厄日たる二百十日の前日であつた併し平和な天日は麗らゝかに人々を輝して居た處が午前十一時五十六分、人々の多くは今正に晝の食事につかんとし、或ひは既に一家樂しい食膳を圍んで居る時であつた。突如何處ともなく異樣な響きを聞くと共に大地はぶる〳〵と顫え出し或はドンと突き上げられた來る!來る!大地シン來る。スワと思ふ間も無く煙瓦崩れ瓦飛び、柱は挫けて家は倒れ、夥々たる土砂の煙り立ち上ると見れば忽ち紅蓮の焰は四方に起つて家から家へ町から町へと燃え移る。驚いて戸外に飛び出すもの、倒れて傷くもの、逃げ後れて壓死を遂げるもの、逃げ惑ふて泣き叫ぶもの、子は親を失ひ、妻は夫に別れ、阿鼻叫喚の聲全市に滿ちて慘又慘。地は間斷なくふるひ地シンと共に水の手が止まつた上に二百十日の烈風が吹き出したので猛火は縱横に燃え獵がり、黑煙天日を閉ざして物凄ごく今にも世の終りが來たかと思ふ樣な阿修羅地獄を現出した。

斯くして東京市内八十八ケ所に起つた火は、日比谷と云はず、銀座と云はず、日本橋、兩國、本所、淺草、下谷、神田、芝、赤坂と忽ちの内に帝都の大部は怖ろしき火焰の海の底に沈められた。全市は焦熱地獄と化した、ソノ火は其日の晝から一晩中燃え、翌二日も一日燃え續けて其日の夕方に漸く止んだ見れば全市一望焦土と化し、玆に三百年の文化の華、大江戸の昔から築き上げられた東洋一の大帝都大東京は一瞬の間に茫々たる燒野原となつて仕舞つた。何たる大慘事であらう。

殊に悲サン中のサシとして永久に恨の消えないのは、本所被服廠跡で三萬四千人の人々が避難中に火焰の大旋風で一瞬りもなく燒かれた事と隅田川の各橋上に避難した人々が、橋の兩端から燒けて來る火に攻められて雨の樣に水中に燒け落ちたと云ふそれである。斯くの如きは今迄の人智の限りでは到底想像だにし得なかつた空前絶後サン鼻の極と云ふ可きである。我等は之を叙しそれを弔ふ可き筆も文字も到底持ち得ない。

又更らに眼を湘南一帶に轉せんか、シン源地が相模灘に有りし爲か、横濱、鎌倉、小田原、其他の都市村落一つとしてサン害を蒙らぬはなく、或は激シンに搖り倒され火事に燒かれ、又は海嘯に襲はれて死傷算なき内に殊にサン鼻を極めたのは横濱市であつた。第一回の地シンが東京よりも餘程烈しく全市は全く一軒も殘さず一度に破壞し盡され續いて火災を起し完全に燒け仕舞つた横濱全滅の文字は決して誇張でも何でもなく即ちシン源地は横濱直下ではないかと云はれる位空前の大激シンであつた。

其他の地も本誌別項に示す如く、何れも數多の死傷を出して居るが取り分け申すも恐れ多き事は御痛わしき皇族御三方の御薨去である。山階宮佐紀子殿下は鎌倉で、閑院宮寛子殿下は小田原で、東久邇宮第三王子師正王殿下は鶴沼で、何れも末永き御壽命を持たせられながらシン災の爲めに御悼ましき御最後を遂げさせ給ふた事は返す〳〵も殘念な事であつた。

數え來れば今回の大シン災は全く古今未曾有で、其サン害の程度範圍の絶大な事は我等話に聞く安政の大地シン等の及ぶ可くもならぬ大シン災であつた。玆に其サン害の數々詳細を記するの紙面を持たないが苦心蒐集せし本誌の生命たる寫眞は、其眞相の大要を現出して遺憾なかる可く其一頁を開くも凄サンの光景に何人も面を蔽ふ可く罹災者は備えて以て紀念復活の資料たる可く、他の人は以て同情援助の好紀念物たる事を信じて疑はざる處である。

終りに御薨去遊ばされし、三宮殿下を初め奉り此難に殉せし幾十萬の英靈に對し謹而哀悼の意を表し且又各地の復興に向つて奮發努力せらゝ罹災者各位の前途を幸を祈つて筆を擱く。

帝都の燒失總戸數は三十一万六千余戸

罹災民百卅五万余人

警視廳の調査

警視廳の調査せし處によると市内の全戸數四十四万五百四十九戸人口二百三万一千三百九十一人中戸數の方では七割一分强の三十一万六千八十七戸また人口に於ては六割七分强の百三十五万六千七百四十名は何れも震災或は燒け出された者でこれを各区別にすると

	戸數	人口
麹町	五七二三	二九四〇二
神田	四六七一九	一七五四二一
日本橋	二六〇二〇	一一五九〇五
京橋	二八二九八	二三一〇四〇
芝	一五六五八	七六七二六
麻布	九	四五
赤坂	二二七二	九八三
四谷	八七七	三六八八
牛込	四	下
小石川	九五六	一七六九四
本郷	八九三	明
下谷	六	四五三六
浅草	三二七九五	二二六二九〇
本所	五一八八三	一四〇七八八
深川	五九三〇〇	一七四八六七
總計	三六〇八七	一三五六七四〇

帝都の死体の取かたづけについては十三臺の貨物自動車を二千名の人夫を以て極力燒却につとめて居るが八日夜半までに收容燒却した數は

浅草	二百五十
同	二百十四
千住	四十
吉原病院跡臨時火葬場	
田中町臨時火葬場	
区役所跡	
七軍町同寺	
三ヶ瀬	三千
谷中墓地	百五十
深川	百八十八
平久町上	七十二
亀戸	二百七十
向島	百七十五
改修河川放水路堤上	
言問橋附近信成寺	
織町臨時火葬場	
深大寺町上火葬場	

其他仮火葬場等で燒却した分を合算すると約六萬以上に達しているが尚この外隅田川に墜落溺死して居る者窪屋の下敷となつて壓死或は燒死して居る者道路に黒焦になつて倒れて居る死体は実に二十万を突破する見込である

415
30